

航 空

あゝ南海の飛設隊

愛知県 岸 勝 一

昭和十八（一九四三）年四月一日、浜松の高射砲隊に入隊する。連日の猛訓練、自分達は後で判ったのだが、楓第三十二師団の配下として、南方の島ハルマヘラ島に飛行場設定隊として行く先が決まっていたのでした。西イリアン（西部ニューギニア）西方のハルマヘラ島に飛行場を建設するといふのである。

一期の検閲も終わったので、日夜建設作業の訓練である。初めての重機の操作には手こずったも

のでした。教官や助教の指導で何とか、重機ブルドーザー等が動かせるようになり、昭和十九年六月、勇躍連隊を出発、門司港より乗船、車輛四十九台を乗せ、暗黒の海へと出航した。船団編成のため、九州沖に待機する。

洋上の朝は早くから明け、我ら、輸送船十二隻は四隻の護衛艦に護られて、九州沖に出帆、いよいよ万里の波濤の征途へ、たそがれの港の灯は、暗紫色にかすんで行く。「祖国の山よ、生きて再び見る事はないであろう。さらば祖国よ」。万感胸に込み上げて来る。祖国防衛の爲に生きては帰れぬ戦場に向かう数万の兵士を乗せた船団は「ボー！ ボー！ ボー！」と汽笛を鳴らし続けて、夜光虫の波線を残し、暗闇の航路を南太平洋

へと航行する。

南シナ海沖を通過したら、海が黄色に濁っていると思ったら、暴風雨のためだった。船は大きく揺れ、大分船酔いも出たようだ。自分はそれ程でもなかったので、甲板に出て雨水により今までの汗と垢を洗い落した。フンドシ一本になった。兵隊は甲板いっぱいである。一夜明けた翌日暴風も去り、波も静かになった。だが、南下するにつれ、暑さは増すばかりである。前方に島が見えて来た、台湾だと言う。

船団は高雄に入港、燃料や食糧の補給をする。小舟がバナナや飴菓子等を売りに寄って来る。安い安い。バナナ一籠五円とか、小隊全員でも食べ切れない量だった。それに下給品として、金米糖一人当たり飯盒二杯分が配給された。

台湾はさすがに暑い。赤い屋根、椰子の木、中国服を着た日焼けした顔、初めて見る南国の情景に皆、目を見張るばかりであった。

翌日午前九時頃だと思う。高雄港を出航一路比島マニラへと船足は進む。バシー海峡は油を流したように、穏やかで、トビウオの群れが飛び交う情景であった。と突如甲板に砲声が響く。「スワ！ 魚雷攻撃」と飛び起き甲板に出て見た。各輸送船は船尾甲板上の砲門から目くら打ちに火をはいている。「対島丸」も明治生まれの旧砲門から負けじと打ちまくっている。各船は汽笛を鳴らしながら、暗夜の海を散開する。緊張と興奮で身が震えていたのを覚えている。突然後方で轟然とした音と共に大きな火柱が上がった。続いていた。

情報によれば二隻の輸送船が撃沈されたようだとと言う。護衛艦がその救助に当たっているとのこと。我々の船だっという撃たれるかも知らない。上弦の月は、この地球上の争いをただ冷厳に見守っているのみである。

翌日の正午過ぎ、鈴木一等兵と共にブルドーザーの中で昼食していると、またも「敵潜水艦が

現れた！」と伝達された。直ちに救命胴衣を着用して避難態勢に入った。船団は互いに汽笛を鳴らしながら横隊に散開した。対潜監視哨より「左舷前方！ 魚雷！」と絶叫するのが聞こえる。見ると白線を引きながら、波間を縫うが如く「対島丸」に迫って来るのが見える。

魚雷が一発、二発、続いてもう一発、我々は皆、救命胴衣を背にして息を飲む。もう駄目か？ しかし老練な「対島丸」の艦長は巧みに操舵を操り、魚雷をうまく外してしまった。天の助けとばかり全員船長に対し両手を合わせたのだった。

今日もまた敵潜艦の雷撃を警戒しながら航海を続ける。波は静かであるが、各人の神経はピリピリしている。時折イルカの群れに会うが魚雷ではと見間違える。船団はさらに南下すると、かもめの群れが飛来している。ああ陸地が近いぞと感じとれた。早朝爆音がしたので敵機襲来かと思った。友軍機である。地獄で仏に逢った思いである。

我々輸送船団は友軍機の護衛により、無事マニラ港に入港、直ちに上陸して驚いた。白亜のビル、緑の並木、真っ直に伸びた広い街路、疾走する高級乗用車、欧風化された近代都市である。外国タバコの販売所等まさに日本では見られない情景である。午後四時には船に戻り、甲板上で休む。甲板上に吹き寄せるそよ風、強者達は何を夢見ているのだろうか。満月に近い月はその光を海に投げ、マニラ湾は金波銀波となっている。「今頃故国の母や兄弟は俺の事をどんなに心配してくれていることか。想いを故国に走らせるのは、俺だけじゃないだろう！」いつしか深い眠りに入る。

翌朝、点呼と共に甲板に整列、各隊ごとに車輜、その他の機材等を積載して、午前三時三十分マニラ港を出港する。いよいよ最前線へ、船団八隻で、敵潜水艦の雷撃を避けるため、フィリピン群島の間を縫うが如く南下する。

椰子の葉繁る緑の島々、見え隠れる粗末な土人

の家々等を右に眺めながら船団は進む。午前十時頃だったと思う、いよいよ目的地の島、ハルマヘラ島ワミレ湾口のロバタ栈橋に接岸する。南国の海はあくまでも透明で大きなテーブル珊瑚が間近に見える。やがて軍需品の揚陸が開始された。

「対島丸」のクレーンが忙しげに鳴り響いている。何しろ重機のブルドーザーや、その他の機材である。その荷降ろしには、かなりの時間を要した。その間、自分達は上陸し、南国特有の甘酸っぱい密林の香りの中、隊伍を整え、休憩し、夕飯を取る。椰子の葉蔭から洩れる南十字星を頭上に眺めながら、自分はブルの運転台にて仮眠をする。

翌日朝食後、ブルドーザーを運転、ロロバタを出発する。途中、他部隊（京都）の兵を乗せ、お礼に椰子の実を貰う。生水は飲まないようにとの注意だが、初めての椰子の実の水には喉の奥まで味わうことができた。時折、南国特有のスコールが降り、道路は水浸しで悪路となり、行進にも困

難をきたす。

第一中隊の辻井君が、キャリオールの巨体がぬかる路に入って、持て余しているのを見て、自分達のブルで牽引してやった。そして午後三時頃ハテタバコ第一飛行場に到着した（海軍基地）。

六月も中旬だと思う。自分達は第二飛行場の設定作業が任務であった。炎天下の椰子の浜辺の飛行場、ごうごうと陸軍九一式陸上攻撃爆撃機が決死のマフラーをなびかせて滑走路を飛び立っている。雄々しくも死地に赴く爆撃機、地上では帽子を振り見送る。将兵の胸の中では、ただ無事に帰って来てくれと祈るばかりである。

我々飛設隊は、友軍機を敵の攻撃から守るため掩体壕といって、三方囲いの土堤（格納庫）を造るのであった。炎天下汗まみれになって白い珊瑚の岩盤を削り取り滑走路を造っていた。そのうち「空襲警報！」とサイレンが鳴りわたる。蜘蛛の子を散らすように散開する。敵は超低空にて爆弾付のパラシュートを落下させる。自分達は壕の中

に退避したので難を逃れた。作業を終えて夕焼けの浜辺を軍歌を歌いながら宿舎へと戻る。しかし我々が造った掩体壕には今朝程飛び立った四〇〇機もの若鷺は一機も還らず、南海の海に散って行ったのだ。

それ以後、制空権は完全に敵のなすままとなり、襲い来る雲霞の如き何百機、ノースアメリカンB 24爆撃機、P 38双胴戦闘機の大編隊が我々の飛行場建設を阻止せんと、爆弾の雨を降らせたのだった。大地は揺れ、雷のごとき音声は連日のようになつてきた。我々はブルで地ならしどころじゃない。空襲の度ごとに防空壕に退避せねばならず、兵舎の影も少なくなり、友軍の燃料タンクも爆発して火柱がたち、空もいっぱい黒煙となり、まさに修羅場と化したのでした。

密林の中には友軍の爆弾（五〇〇キロ）が野積みにされてある。あちらにもこちらにも山積みされていて、いつ誘発するか危険であつた。何人か

の戦友は重傷を負つて軍医の手当を待っているがなかなか到着してくれない。かなりの負傷者が出た模様だ。高射砲隊は敵機に向かって、ねじり鉢巻きで撃つてはいるが、直撃弾を受け空中に吹き飛んでしまった。密林は薙ぎ倒されて、焼野原となつてしまった。やがて敵機も去り、滑走路とは見ると、至る所弾痕の跡で見る影もない。この大空襲以来、連日のように爆撃を受け、我々部隊は宿舎を山へ移動することの止むなきに至つた。

この移動の途中でまたもや空襲により吉岡軍曹以下二人が機銃掃射で名譽の戦死を遂げられる。自分はその時は Deng 熱で病床にあつたので、難を逃れたのでした。

九月十五日、敵船団がモロタイ沖に現れたとの報が入り、いよいよ風雲急を告げ、このハルマヘラでの玉砕を覚悟しての陣地造りとわが身の墓となるのかもしれないと思いつつ壕を掘った。この大船団はモロタイ島を攻略して飛行場を確保、数

日後に北上してレイテ島に上陸した艦船百数隻である。わが軍は皆荷物を負って転びつつ山道を登り、ぬかるみに足を取られ、軍服は破れ裂け、無我夢中で山中へと逃れた。人魂とまごう群れなすホタルの光である。

大分山の中へ来たので、今夜はこの辺で野宿というので枯草を集め棕櫚の板を見つけてうとうとと寝る。翌朝は泥道の行進で、見つけた棕櫚の板を道に敷いて歩いた。突然野豚が現れたが、銃を執る暇がないうちに逃げられてしまった。また密林の大木の背にいた大とかげには驚かされた。九月下旬重車輜部隊にメナドへの転進命令が下達された。

ハタタバコ〜ジャイロロ

暗闇の海を敵の目を盗み、島伝いに移動する。一夜明けドテンガ棧橋も霧の中だった。払曉たちまち敵機の機銃掃射を受け、逃げ場もなく、装具を背に道なき道をボバネコ方面に逃げた。ボバネ

コというところは十八世紀頃に建てられた砦跡である。砦跡には射ち落された敵機の残骸がまだ煙っていた。

二泊三日の後、ジャイロロへ到着する。ここジャイロロという集落は、香辛料の集散地として栄えた集落だという。また日本人で江川という人の経営する農場もあるという。我々はジャイロロより船または飛行機にてセレベス島のメナドへ転進の予定だという。その夜は豪壮な提督官舎の一室で一夜を宿すこととなった。渚より湧きだす温泉があり、その湯にひたり、今までの戦塵の垢を洗い落し、天国に行った気分であった（キルナテ島）。

銃を手に入れた土人の空家を探索に出かける。大きなザボンを見つけたが、まだ未熟で皮ばかりで食べられない。今度は放し飼いの鶏を追えども捕らぬ、あちこちの柵に転がっている卵を戴く。並木道は幾百年もの前に造られたであろう石だたみの道路である。しばらく行くと川があり、吊り橋が

かかっていた。これを半ば程渡った時、夕日を背にして大編隊のグラマン機の襲来である。壕の壁にへばりついて退避する。

慌てて壕の中へ逆さまに転げ落ちた者もいた。

爆撃は日毎に増え、我々を運ぶ船はなかなか着かず、放たれた鳥同様の身となった。待機する。小牧山の森の中でキャンプする。まず飯盒炊事をするにも火種が必要、古参兵の誰かが竹と竹をこすり合わせて火造りをしたようだ。できるだけ煙りの出ない枯竹を焚いて炊事にかかる。密林の小川を堰き止めて海老を漁り、また、うなぎ等を漁って栄養源とした。

ロンゲ（ロンゲン）

毎月満月の夜、村の広場に村中の老若男女が集い、椰子酒を汲み交し民謡と太鼓に合わせて夜明けまで踊り楽しむ、というのである。今夜も満月である。遠くより太鼓の音が聞こえて来る。自分達も軍票をまいてロンゲの客となり、椰子酒に酔って仲間入りし、マレイ語の本を片手にして会

話する。片言ながら何とか解ってもらったようだ。竹筒の手品などで土人と楽しい時を持った。招かれて土人の家に行ったりもした。

椰子の甘露

なつめ椰子の花房の付け根を一週間余り叩いた後、その中途を切り落とす滴り落ちる甘い汁のことである。またバナナあるいは自分達はパンの実等と言ったが、大きな木の枝でなくて樹に成り、ぶらさがっている大果実である。重さは一個約十キロ位はあった。それを採って一週間位置くと中身がやわらかくなったら、スプーンで食べるのだが、肉質がクリームのようにで五、六人でも食べ切れなかった。

椰子ミルク

ココ椰子の中にあるコプラという肉を削り取り、絞り出したミルクのような果汁で、南国ならではのこれらの珍果等を食べさせてもらった。

電気のない山の中、灯油作りも一苦労であった。椰子ミルクを焚いて、煮詰めると油ができる

のである。この作業も日課の一つでもあった。山中をさまよい歩き野草やワラビ等で腹を満たし、どこまで逃げたらよいのかと、ただ指揮官の言うがままに、さ迷い野宿の毎日である。メナドへは渡れず、帰隊の命令があった。

密林の中に水路が流れていた。我々は小舟を見つけて川を下った。川辺にて名も知れぬ貝の雑炊を分かち合っていると爆音、あわてて火を消した。が炊煙を目当てに、ロッキードが銃撃して来た。幸い誰も異状はなく敵機は飛び去って行った。そして昭和二十年四月、ハテタバコの本隊へ漸く帰還することができた。本隊の戦友は幾千人とも魂と成り果ててしまい、残った者は皆痩せ細ってボロ衣をまとって農作業をしている。その迎える戦友の姿の悲しさを見て、思わずもらい泣きをする。

部隊に無事帰った我々も、いよいよ自給自足の生活に入った。爆弾で焼かれた米も皆黒くなり、それでもそれを粥にしてすすった。襌一つで農作

業、開墾した畑で芋を作る。そして炊事場で粥にして配給されるが、腹の虫は不足でぐうぐう鳴る。土人の栽培している砂糖きびを音のせぬように盗んでは、かじりしゃぶったものだ。

昭和二十年八月十五日、敗戦の命令伝達となる。敵機は悠々と頭上を飛び、投降のビラを撒いて行く。そして空からのマイクで「日本の将兵の皆さん、日本は無条件降伏をしました。故国の親や子供達は貴方達の帰りを待っています。今直ぐ銃を捨てて出て来なさい」と日本語で呼び掛けるのでした。本当に日本は負けたのだろうか、なかなか信じられなかった。確かに連合軍の機動部隊にはさんざんな目に合わされ、幾多の戦友が犠牲になり、今度は自分達かと幾度思った事か。

想えばこのハルマヘラ島に上陸以来、極悪部隊長と兵隊から言われた中佐の指揮の下、灼熱の炎天と激しい敵の空襲下において、昼夜の別なく連日の飛行場の建設と、道路及び陣地の構築等、実に過酷な重労働に明け暮れる毎日であった。また

戦況は日毎に悪くなり、本国からの総ての補給は途絶えて、食糧は自給自足のほかに道なき状況にある時、我が食糧倉庫が敵の空襲により大半が焼失してしまった。

しかし部隊長は、これが己の功績に及ぶ事を恐れてか、地区司令部へ報告を行わず、従つて司令部からの補給は全く無く、哀れにも将兵は焼け焦げた米を拾い集めて粥をすすった。また他の部隊の食料や土民の畑の芋等を盗んで飢えを凌ぎ、飛行場の整備や農作業などの重労働を強いられた。

このため痩せ細り、遂にはマラリア、栄養失調、赤痢、其の他の病に斃れる将兵が続出し、野戦病院よりは給与の待遇改善に適切なる処置をすべしという勧告にも耳を貸さず、部隊は乞食部隊、骸骨部隊との異名すら付けられ、さながら地獄絵の如き悲惨な姿であつた。しかるに部隊長は己のみは豪華な食事をして、献立が気に入らなければ、当番兵にまでも暴力を振るい権力を笠に横暴を極めた。

わが身の功績と出世のみをあせる余り、部下を虫ケラ同然に取り扱い、多くの将兵を死に到らしめた。このような鬼畜同然の振舞いに対して整備中隊の里見上等兵は、自分を犠牲にして多くの戦友を救おうと中佐に手榴弾を投げて重傷を負わしめ、自らは拳銃自殺をしたのだつた。その犠牲的精神と戦友を想う心には全員感謝し褒め賛え、其の名を紙片に印し御守袋に入れて持ち帰つたのでした。

その後無事帰還した戦友達は彼の郷里である伊豆の下田にお墓を建立し、昭和五十九年には同地に鎮魂碑を建立、法要を営み、過ぎし日の彼の行動に改めて慰藉の念を捧げたのだつた。このような事件発生後、部隊長は更迭されたのである。

このような生死の境をさ迷いながら、飢えと病と敵との三重の戦闘生活であつた。けれども今二年間の数々の想い出を胸に秘めて島を去るに当たり、帰国できる喜びと共に感慨無量、一抹の哀愁と懐かしさを覚えるのは、吾れ独りのみにあらず

と想う。

復員船の甲板から望まれるハルマヘラは、上陸当時とは変わらぬ南国特有の美しい景観をとどめ、南国の楽園のようである。しかし、あの椰子の根方には、痩せ衰えた身体をあばら家の病床に横たえて、遠く肉親の事を想いながら、無念の涙を吞んで帰らぬ人となり、あるいは憎き敵弾に倒れた幾多の若き戦友の屍が眠っているのだ。後髪を引かれる思いで次第に遠ざかるハルマヘラ、もう二度と訪れる事はないであろう。

昭和二十一年五月二十日、久里浜に上陸、検疫を済ませ、それぞれ戦友の遺骨を胸に帰郷の途についたのだった。

国破れて山河有り、郷里の山々は懐かしく迎えてくれた。戦後五十有余年を経て、戦争を知らない世代の国民の三分の二を占め、平和な有難き泰平の世に豊かな物資、文化の美酒に酔っている。

一方当時敢然として戦場に赴き、祖国の勝利と民族の発展を祈り、あとに続く者のある事を信じ、

異郷の地に散華した数百万の英霊に対し、感謝顕彰する事をややもすれば忘れられている。一部マスコミは、それを軍国主義の復活の兆しの如くに批判反対論を唱え、政争の具となすが如きは言語道断であり英霊を冒瀆するものと思う。

また、一部の外国の内政干渉により、慰霊の行事すら憚れる風潮にある事は誠に残念であり亡き戦友に対して申し訳なく、断腸の想いである。我が国の首相等が諸外国への親善訪問に際し、その国の無名戦士の墓に参拝、花束を捧げて敬意を表している事は周知の通りである。いわんや自国の戦没者を祀る靖国神社に参拝慰霊する事に何の憚ることがあろうか。

戦争の敗者のみが戦争の犯罪者ではない。勝者もまた犯罪者であり共に被害者でもある。この愚かな戦争を再び繰り返すことのなきよう永く子孫に伝えねばならない。そして恒久に平和を守り、その尊さを祈りたい。